

北アイルランドにおける「下からの平和」の方法 ——「アイランド・パンフレット」に見るコミュニティ・グループと コミュニティ・メディアの連携——

愛知県立大学 福岡千珠

1. 目的

本報告の目的は、紛争を抱えた社会において、地域住民の主体的な参加に基づいて草の根レベルの生活改善を行ってきたコミュニティ・グループが、どのように平和で安定的な社会の構築に貢献したのかを、北アイルランドの事例から論じることにある。紛争を抱えた社会における平和構築において、国際機関や国連関連機関、国際 NGO が重要な役割を果たしている。一方で、平和構築とは衝突や紛争を抱えた社会関係を継続的に変化させていくプロセスであるとする考え方から、専門的知識に基づいて外部の機関がもたらす「上からの平和」の問題点も指摘されるようになってきた。例えば、外部の支援者は地域ごとに異なる社会的・文化的なコンテクストに対応できず、西洋で発展した紛争解決のモデルを伝授する傾向がある (Lederach 1996)。また、現代では「戦いの主体が複雑で錯綜」しており、「異なるコミュニティの間と同時に、一つのコミュニティの内部でも戦われる」(栗本 2011: 130) ことが多いが、外部からはその実情を把握しにくく、村落や部族を単位とした対立や、集団内の少数派の声やニーズは見落とされがちである。上記のような「上からの平和」の限界に対し、当該地域の人々の主体的参加に基づく平和構築(「下からの平和」(栗本 2011: 147))も模索されるようになってきた。例えば地域の文化的・伝統的規範や制度に依拠した和解の方法が試みられている。しかし、方法論が「伝統的」であることが重要なのではなく、地域の人々が主体的に選択して実施し、参加の必要性を感じられることこそが重要であるといえよう。本稿では、上記の議論をふまえ、北アイルランドの紛争地域に住む人びとが、地域に根差したコミュニティ・グループを作り、草の根の生活改善のみならず、自己の再解釈や相互理解に取り組んだ事例に注目する。そのうえで、紛争地域の人々がなぜコミュニティ・グループという形を選択したのか、人々の認識がどのように変化したのかを明らかにする。

2. 方法

上記の目的のために、コミュニティ・グループの声を発信し続けたメディアである「アイランド・パンフレット」を取り上げ、そこに見られる人々の語りを分析する。

3. 結果・結論

分析から以下のことが明らかとなった。コミュニティ・グループの参加者は、女性や労働者階級の住民など、紛争前は公の空間から排除されていた人々が多く、グループはそれらの人々がエスノナショナリズムやマスメディアから抑圧されてきた少数派の語りが可能な場となっている。また、参加者は、紛争の経験を共有する人々と連携して活動することによって、「プロフェッショナル」にはできないことが可能となっていると感じている。これらのグループには、これらの声をパンフレットという形でコミュニティ・メディアが印刷し、グループ外にも発信してゆくことによって、コミュニティ間の相互理解に貢献しているといえる。

《文献》

栗本英世, 2011, 「コミュニティから平和を創る—南部スーダンの現場から」藤原帰一・大柴亮・山田哲也『平和構築・入門』有斐閣, 126-150.

Lederach, R., 1996, *Preparing For Peace*. New York: Syracuse University Press.